

全国審査員からひとこと



全国審査員からひとこと



新たな表現の傾向

今回の審査で出会った子どもたちの作品には、コロナ禍による閉塞は感じられませんでした。しかし、ICTの普及やゲームに触れる時間が長かった子どもたちの表現に、新たな傾向が出てきている気がします。それは、ゲームが一つのステージをクリアすると次のステージへと進むように、画面上に複数のイメージが並行して描かれる表現です。一つの画面が複数のテーマで構成される表現は、新たな造形的な思考として注目に値すると思います。



大坪 圭輔 武蔵野美術大学教授

多様な表現を育む環境の確保

高学年になるに従い再現描写力を競う作品が圧倒的に増えます。それが、児童生徒たち本人が希望した技術向上の関心の結果であれば良いのですが、仮に児童生徒本人が希望していたとしても、彼らが絵画による表現領域の広がり、つまり様々な絵画の形態や役割を知らないことの結果であれば、指導者側の視野拡大も急務です。指導者自身の作品制作活動や美術の動向を知るための美術展鑑賞も必要です。知的精神的成長の著しい彼らに描くことを通して身につけてもらうべき内容は広範囲で、もっと多様な表現が期待できるはずです。



加藤 修 千葉大学教授

多様な創造の翼の羽ばたき

「教室の学習」では、導入時に作品の仕上がりや方向性を子供たちに指し示します。しかし、それは出発点であり、そこから子供たちが如何に創造の翼を広げ羽ばたかせることができるかが重要です。作品が当初の指し示した「かたち」をなぞり、そこから一歩も踏み出さないようでは「創造的な作品」とは言えません。授業ではどうしても同じ結果を求めがちですが、異なる個性を持っている子供たちの作品が多様な創造の翼を大きく羽ばたかせた成果であることを期待しています。



玉川 信一

全国教育美術展 担当理事、筑波大学名誉教授



全国審査の楽しみ

障がいのある児童、生徒の作品を見て面白いと感じるのは、いろいろな画材、画法を駆使して制作されているのも、どこかにその人ならではの表現が隠されているからです。走り抜ける描線や自由奔放な色の重なり、爆発するような形…作品の中にその独特な表現を見つける楽しさが審査の醍醐味なのです。ずらりと並んだ作品たちの中から個人的な声や動きが聞こえてくると、私はついどんな人がどんな会話を先生としながら描いたのだろうと想像してしまいます。



金子 光史 アート工房「フェイス of ワンダー」代表

自由に表現する喜び

画用紙を前にした子どもたちは、この絵をどんなきつかけで、どこから描き始めたのか、描画過程では何を思い、何を感じながら描き進めたのか、そんなことを想像しながら一枚一枚に心を留めて見させてもらいました。リズム感のある線や色の並びからは描く楽しさが、塗り込んだ混色や色の固まりからはこだわりや感情が、見えてきます。こうした子どもの自由に表現する喜びが見える作品の背景には、日常的な安心感や、いつも受け止めてくれる大人の存在があると感じます。大事なことです。



栗山 誠 関西学院大学教授

探究の根が思考を育てる

思考には、試してみる「試行」、一つにまとめる「指向」、好きな事物の「嗜好」、目的に向かう「志向」、高みを求める「至高」、発生する「施行」と読みが同じ漢字があります。思考がライフスタイルを創出します。興味のある土の中に探究の根をのびし、思考の苗が地上に芽生え心を耕します。茎がのび葉と表現の花を咲かせ、芸術の実が身体を助けます。生きることは、太陽の光と水、自然の恵みをいただき、変化することです。変化を探究する意欲は、創造の自由をつくる空間から生まれます。

石丸 良成 東京都立八王子西特別支援学校非常勤教員



今こそ、造形の力を

コロナ禍にあっても、各地の先生方が豊かな描画体験を願って過ごされたことが伝わってきました。しかしそれが、子どもたちの熱量を上回ってしまったように思える作品も多くありました。この2年間、子どもたちは園や学校だけでなく地域や家庭でも様々な制限を強いられ、心身ともに社会の緊張感、閉塞感を感じてきたのではないのでしょうか。もつと伸びやかに感情を出し、安心して自分を表現できるように、今こそ、造形教育の役割を見直すときのように感じます。

伊藤 裕子 学校法人裕学園 谷戸幼稚園園長



描くことは「なこころ」の「まなこ」

描く／つくることは、その対象に入り込むような空想の時間です。同時に、外から対象を見る探究の時間です。その間、子どもは対象に「なる」、その状況を「みる」、そして思考を巡らす空間にいます。集まった作品は、対象(テーマ)と深く交わり、なつて／みて、形や色などで時空間を旅するような思考と行為の痕跡がうかがえました。そのことを審査員同士で分かち合うことは、気づきと学びの連続でした。この誌面で、展示会場で、日々の学校で、子どもたちの作品をめぐる、様々な対話が生まれると素敵ですね。

郡司 明子 群馬大学准教授



子供の挑戦を支える

「どのようなことを表したかったのだろう」「どのようなようにして表していったのだろう」と、子供が表す過程を想像しながら、一枚一枚の絵を拝見しました。多くの創造的な作品と出会えました。「創造的に発想や構想をしたり、表したりする」ことは、とても大切なことであると同時に、とても難しいことでもあります。そして、やりがいのあることです。子供たちの表現を、見守り、受け止め、認め、励ます、そんな先生方の存在が、子供たちの挑戦を支えているのだと思います。



小林 恭代 国立教育政策研究所教育課程調査官



絵よ 思いを語れ

私は児童画を観る時、「この子は何を描きたかったのだろう」と目と心を研ぎ澄まして見入ります。すると、その子の感動が、思いがダイレクトに伝わってきます。何かに突き動かされるように没頭して描き続ける姿も見えます。そして、この子はより良いもの、美を追求しながら脳内のイメージを線・色や形で具体化し、思いを自在に表現したのだと思います。学校教育の中で、こうした自己実現の学習活動を保障する図画工作と関わり続けられたことに、感謝の念を覚えます。今回の全国審査会でも、そんな作品にたくさん出会えました。

佐藤 あい子 岩手県盛岡市立高松小学校 校長



子供の思い、形や色、無限大！

全国教育美術展の全国審査に初めて関わらせていただきました。コロナ禍で子供たちの表現は、閉じ込められているのではないかと心配しておりましたが、「黙食」ならず「黙表」で自分の内面と対峙しながら、創造をふくらませ、黙々と表現を楽しんでいる様子が絵から伝わってきました。うれしく思いました。それぞれの作品が、形や色にこだわり丁寧に表されていました。形や色が広がる世界で、子供たちの思いや願いを感じ取り、審査させていただいた時間は夢のようであったという間に過ぎました。コロナに負けず、無限に広がれ 子供の思い、形や色の世界！

三京 真理 広島県広島市立伴東小学校 校長



「何を表したいのか」を大切に

昨年度から引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、感染予防をする中で、力いっぱい描いた子供たちの作品と出会えてとてもうれしく思います。作品を見ると、子供たちはそれぞれの今の自分を大切に「何を表したいのか、どういう思いで表現しようとしているのか」をしっかり考えながら描いていることが伝わってきます。これからも一人一人の子供が素直に自分の力を発揮し、豊かな感性や創造性を大切にしてほしいと思います。

平田 朝一 国立教育政策研究所教育課程調査官



コロナ禍開催なので…

コロナ禍開催なので子どもたちからの表現が大きく変化しているのかと覚悟していましたが、子どもたちはたくましい。大人は心身耗弱な事件を起こしているのに、4歳児と5歳児を比べても自分の世界を繰り広げているのは4歳児。それほどまでに周囲の大人たちの配慮が行き渡っていたのかも知れない。そうではなくこうした状況だからこそ「絵を描くこと」に注目できる時間を提案したことこそが心の豊かさにつながったのではないかと。

平田 智久 十文字学園女子大学 名誉教授



絵から伝わるリアリティ

審査を通じて、全国の子ども一人一人の表現や絵と対峙すると、実際、ここにその子はいないのに、絵から様々な言葉や考えが聴こえてきて、知らないその子とおしゃべりしているような気分になりました。その子なりに選び抜いて描いた一本一本の線や、色彩などから、子どもたちそれぞれの個性や息吹や存在をリアルに感じる事ができたからです。

芸術は、距離や場所を越えて、人と人をつないでくれるということ、今日、改めて深く感じました。

柴田 亜彩子 NHK制作局第1制作ユニット教育・次世代チーフプロデューサー



子どもの描画は未来へのメッセージ

子どもが描くことは、自己表現を獲得することです。描くことで、未知の自分に出会い、描く事で自分の目の前に広がる世界があることに気づき、表しています。今見て感じている世界から、これから見えて感じている未知の世界への思いが、描画作品に表現されています。未来を豊かにするメッセージ集としての子どもたちの描画作品たち。

照沼 晃子 関東学院大学 教授



創造を支える

奔放に描きながら、塗り散らかしても、画用紙・パス・絵具等の「用意されたもの」がすべてを受け止めて絵画が成ると思うことがあります。ただ、与えられた材料や道具に備わる思考を越えた成り立ちの作品を拝見するたびに、制度や作法・技法にとらわれないことなく学びから創造へと飛躍する子供たちの可能性に驚きます。そして、彼らに寄り添うのは、そうした創造活動の喜びと戦慄を感じる大人たちであることを思います。

仏山 輝美 筑波大学 芸術系教授



令和の図画教育と図画の多様性とは

全国各地の教育風土に育まれた作品群と出会う度に「多様性」という概念に思いが至ります。具体的には、「図画」の多様性とは表現形式や表現様式の多種多様性のことなのか？ 使用する描画材料や技法等の種類の豊富さのことなのか？ 主題として取り上げる対象や事象の領域の幅や掘り下げ方のことなのか？ 等々。「多様性」に凡例は相応しくありませんが、令和の「図画の多様性」について考えながら審査に臨んでいました。

堀井 武彦 お茶の水女子大学附属小学校 教諭



かけがえのない一人一人の表現

コロナ禍でありながらも「自分の思い」を自分でできる表現方法で描いた多数の作品と出合い、「元氣」をもたうことができました。

全国教育美術展は「教室の中から生まれた子供の創造的な作品」を審査するという趣旨から、発達段階と表現の在り方が示されている学習指導要領を意識して作品を選びました。子供が楽しんで満足できる作品づくりには教師の指導が欠かせませんが、そのバランスを検討していく必要があると感じています。

外山 典子 福岡県北九州市立竹末小学校 校長



その子にしか描けない絵をそっと後押し

「この子は、これが描きたかったんだ」「楽しそうに描いている」絵が語りかけてくれます。今年は、多くのものや人を描き込んでいる作品がたくさんあり、すごいと思う反面、「余白」の美しさや効果も子どもたちは知っているのかな？ 限られた時間の中で先生が子どもに寄り添い、描く気にさせる、最後まで集中して描き切らせる、漠然とした思いをいっしょに形にしていくなど大変ですが、その子にしか描けない絵をそっと後押ししていきます。

成田 陽子 滋賀県草津市立笠縫小学校 校長



子どもの世界を旅する審査会

床に並べられた絵を見歩きながら、私は子どもの世界をいっしょに旅している気持ちになりました。とてもうれしかったです。このような絵が生まれた背景には、先生方が子どもたちと豊かに関わった保育や授業があったからだと思えます。発達段階を考慮して、子どものよさや個性を丁寧に引き出した指導があったのでしよう。絵の評価は、指導者の評価とも言えます。指導者の責任は重大ですが、だからこそ楽しいのではないのでしょうか。

牧井 正人 福井県坂井市立高松小学校 校長



子どもの創造力をたかめよう

中学生の作品の創造力と表現力の素晴らしさに感動します。出会った多くの作品は、生徒が成長過程の中で、物を見つめたり、鑑賞したり、描いたりした経験の積み重ねの中で想像する力が高まった結果です。図画工作科との連携も大切に、美術科の授業をさらに工夫しましょう。美術館での鑑賞や美しいものを見つめる視覚体験を重ね、日常の指導の中でも鑑賞することを大切にしたい。子どもの気持ちを高める授業を計画しましょう。

松山 明 大阪芸術大学 特任教授

